

年間第三十三主日

2018.11.18

マルコ13・24-32

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

日曜日のミサのたびごとにたどって来た、この一年の教会の典礼歴も、来週の王であるキリストの祭日をもって2018年度の区切りを迎えようとしています。この一年のカトリック信者としてのわたしたちの歩みを振り返って見るためにふさわしい時期ではないでしょうか。今日のミサの福音は、時の流れの中を生きるわたしたちの歩みがどこに向かっているかを、あらためてわたしたちに問いかけています。

この世界とそこにある全てのものはいつか終末を迎えます。けれども、信仰者であるわたしたちにとって、聖書の終末の教えは決して不吉なものでも、わたしたちの思いを暗くするものでもないはずです。洗礼によってわたしたちの中に注ぎ込まれた神の子のいのちは、イチジクの木の花が季節になると芽吹くように、終末の教えによってその生氣を取り戻すのです。聖書に示されている終末の教えは、この世界の終末の先にわたしたちを待ち受けている、新たないのちの世界への展望をわたしたちに開示するからです。

王であるキリストの祭日を前にした今日のミサの福音は、その新たないのちの世界の展望をわたしたちに示しています。この世界の終末の先に開かれる新たな世界は、そこに人の子であるキリストが到来される世界です。ナザレのイエスとして十字架に死に至るこの世の生を生きられたわたしたちの主は、ご自分のことを人の子と言われていることが福音書のあちらこちらに語られています。人の子というこの呼び名は、旧約聖書のダニエル書7章にその起源を見出すことができます。ダニエル書7章では、ダニエルが見たこの世界の終末の有様が語られています。まず初めにそれまでの世界の歴史を支配してきた四頭の残虐な獣の支配が終わりを告げることが語られます。それに続いて、次のように語られています。「なお見ていると、王座が据えられ『日の老いたる者』がそこに座した」。こうして、「日の老いたる者」すなわち、この世界の歴史の真の支配者である永遠の神による裁きが始まります。そこに人の子が登場するのです。「夜の幻をなお見ていると、見よ、『人の子』のような者が天の雲に乗り『日の老いたる者』の前に来て、そのもとに進み 権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え 彼の支配はとこしえに続き その統治は滅びることがない」。ここで言われている「『人の子』のような者」という

表現が気になるかもしれませんが。人の子のような者とは、天の雲に乗って来るお方、永遠にまします神から全権を受けてわたしたちの世界に来られた、わたしたちの主イエス・キリストに他なりません。この世界に来られたわたしたちの主イエス・キリストは、十字架の死に至るその御生涯を通して、この世界に生きるわたしたちの全てを知っていてくださるお方です。その方にわたしたちのすべてを委ねて、その裁きに服する用意を整えたいと思います。

年間の主日の信仰宣言の中で、わたしたちもダニエル書に示されているものと同じ信仰を表明しています。「主は生者と死者を裁くために、栄光のうちに再び来られます。その国は終わることがありません」。典礼歴の年間主日の終わりにあたって、新たな気づきの中で、終末に向けてのわたしたちの信仰を宣言し、主の来臨を待ち望む心を新たにしたいと思います。